

鶴田町議会議員

# 視察研修報告【教育民生常任委員会】

～ごみ処分場限界に関わる対処法とごみゼロ運動の研究～

視察先 京都府京都市、三重県鳥羽市

期間 平成21年9月1日(火)～3日(木)

参加者 戸豊、花田正逸、尾崎進一、加賀谷忠栄、北谷正則



京エコロジセンター屋上に設置された太陽光発電パネル



△館内各所にごみ処理の資料を展示



△館内にある人力発電マシン



△太陽光の発電量を示すモニター

## ◎視察1 京都市「京エコロジセンター」 【通称：エコセン】

知っていますか？トイレの水は1人あたり2ℓのペットボトルで何本？

ごみ処分場問題と地球温暖化は何の関係があるのだろうかと思われ、循環型社会を推進している自治体の一番先のタイトル

が地球温暖化なのです。

今回の施設は、平成9年に開催された地球温暖化防止会議で二酸化炭素削減目標「京都議定書」が採択されたことを記念して造られた、まさに京都議定書のシンボルともいえる施設であり、現在開館9年目を迎え、さまざまな環境活動や環境情報の拠点として、日本のみならず世界的にも重要な役割を担っている施設なのです。建物全体にさまざまなエコロジ設備が施され、来館者が実感で

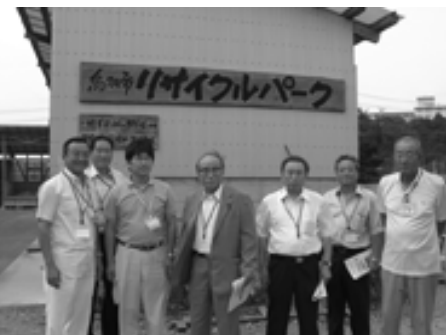
きるようになっており、特に子どもたちにわかりやすいように工夫されていて、ごみがエネルギーとして使えることや普段何気なく使っている水や電気が温暖化につながるものが良くわかる仕組みでした。

ここ「エコセン」の基本姿勢は「気づいて・学んで・活動する」ことにあり、私たちが「なるほど・へー・そんなに」と気づかれました。

皆さんは、毎日どれくらいの水を使っていると思いますか？トイレの水・お風呂の水・洗濯の水・台所の水は？2ℓのペットボトルで何本使っていると思いますか？その合計本数をスパーで買えばどの位の金額になるのでしょうか？ご家族で考えてみてください。(答えは、文末に掲載)

まずは、へーそんなにーと「気づく」ことから始まり、どのように対処するかを図書館で調べたり、実験の中から「学び」、対処の方法が見つかったら即「活動」に移行し、その輪を徐々に広げていくこと、これこそが一人一人が出来ることから始める温暖化防止策なのだと感じました。

わが町の処分場の件に関しても、満杯になったら、また新しく造ればいいのでは済まない問題です。町全体が町民一人一人が循環型社会を理解し、ごみゼロに取り組み、資源化リサイクルに取り組



△理想のごみ再資源化を実践している「リサイクルパーク」

## ◎視察2 三重県鳥羽市 「鳥羽市リサイクルパーク」

むことが重要と考えますし、即解決の即効薬や近道はない！まずは「気づき」が大事だと感じました。また、大掛かりな設備を施さなくても、地球環境に役立つことがあることも学びました。それは、ネットを張りプランターに朝顔・ネ顔を育てることで建物の外壁を太陽光の輻射熱から守り、室内温度を下げることでした。エコセンでは、地域の子どもたちが体験学習としてプランターに種を植え、各プランターに名前を記録していました。わが町の役場西側の外壁にも活用でき、実験してみるべきで、大いに参考になることだと感じました。



△プランターの植物

「ひなたぼっこ」で年間生ごみ250kgをゼロに！

三重県鳥羽市は、観光が基幹産業という土地柄で、ホテル・旅館が多く、生活系ごみの排出量が三重県内で一番多いそうです。焼却施設の使用期限の問題やし尿の海洋投棄廃止に伴う広域での施設整備等の問題により、市が実態調査を行って減量化目標を策定し、2004年水準から2010年に廃棄物15%削減・リサイクル率20%以上を目標としました。

一般廃棄物処理料金の値上げ等の施策により、それなりの効果がありました。調査の結果を踏まえた「生ごみの発生・排出の抑制とリサイクル推進」を始めました。

三重大学の橋本先生の指導の下、平成17年5月「衣装ケースによる堆肥化試行」と、併せて市職員と市民による生ごみ堆肥による野菜・花だんづくりを始め、18年2月には「鳥羽生ごみリサイクル推進会議」を設置、同4月ごみゼロ社会実現プラン推進モデル事業を申請し、同11月県からの予算2千300万円によって施設着工、平成19年3月に完成し、運用を開始しました。この施設は、廃油を利用した石けんづくりや環境教育の場として環境教室・工房「遊(YOU)」、家庭で不用になった

